

特集

浅草寺 の みほとけ

Thematic Exhibition
Buddhist Sculptures
from Sensōji Temple

2021 9.28^火
-12.19^日

東京国立博物館 本館14室

金龍山浅草寺は、推古天皇36年（628）、隅田川に現れた観音菩薩像を本尊とする、浅草観音として広く親しまれる観音霊場のひとつです。慈覚大師円仁（794～864）によって中興されたと伝えられる、天台宗の古刹としても知られます。昭和25年（1950）に天台宗から独立して聖観音宗となり、今日に至ります。また、東京国立博物館と同じ台東区に所在する古来有数の名所でもあり、江戸時代以降、浅草はその門前町として栄えてきました。

本特集では、浅草寺から寄託いただいた仏像13件17体を一堂に展示します。浅草寺には、絶対の秘仏として他見が許されない本尊のほか、関東大震災や東京大空襲の災禍を免れて伝えられた仏像が多くあります。また、第二次世界大戦後に支援者から寄進された像のなかにも注目すべき仏像が含まれていることが、近年実施された寺内の総合的な文化財調査で明らかとなりました。本特集は、これまで公開されることが少なかった浅草寺の仏像を広く紹介する機会となります。天台宗の古刹であった浅草寺に伝えられる、貴重な寺宝の数かずをご覧ください。

Kinryūzan Sensōji was founded in the 36th year of the reign of Empress Suiko (628), when two fishermen pulled a Kannon sculpture from the Sumida River. The temple was restored by the Buddhist priest Ennin (794-864) of the Tendai school several centuries later, after which the surrounding Asakusa area also started to flourish. This exhibition features seventeen Buddhist sculptures from Sensōji Temple that have been entrusted to the Tokyo National Museum.



1. 不動明王立像

The Wisdom King Fudō

平安時代・12世紀

怒りの表情を浮かべる不動明王は、大日如來の使者であり、右手の宝剣、左手の羂索（投げ縄）に象徴されるように、仏敵を退ける仏として信仰を集めました。巻き髪で、左目をすかめて睨み、牙を互い違いに生やすといった特徴は、平安時代前期（10世紀）以降に不動明王図像の典型となる「不動十九観」にのっとったものと思われます。丸みのある穏やかな肉取り、浅く整えられた衣の襷などから、平安時代後期（12世紀）に製作されたとみられます。

本像は、安永6年（1777）に再建された伝法院客殿（重要文化財）内の護摩堂の本尊として伝来しました。文化10年（1813）の『浅草寺志』に記された像にあたると思われませんが、それ以前の来歴はわかっていません。とはいえ、戦災で多くの堂塔が失われた浅草寺に伝えられる屈指の古像として、東京都指定文化財となっています。



伝法院大書院及び庭園（画像提供：浅草寺）

伝法院とその安置仏

伝法院は浅草寺の本坊で、境内の南西に位置します。東京大空襲の災禍を免れた寺内の数少ない建築で、安永6年に再建された客殿を中心に、書院群などが付属します。貞享2年（1685）から幕末まで、浅草寺は寛永寺の管理下に置かれ、元文5年（1740）からは寛永寺住職を代々務めた輪王寺宮と呼ばれる皇族出身の法親王が、浅草寺住職も兼務しました。通常はその代理が派遣され、この伝法院で執務したのです。

客殿には珍しく、内陣が3室設けられています。中央が阿彌陀如来を本尊とする阿彌陀堂、向かって右側が不動明王（No.1）や大威徳明王（No.2）などを祀る護摩堂、左側が慈恵大師（No.12）などの天台祖師を祀る祖師堂として信仰されてきました。また、変化に富んだ景観が美しい庭園は、国の名勝に指定されており、不定期に特別公開されています。

2. 大威徳明王騎牛像

The Wisdom King Daiitoku

鎌倉時代・13世紀

五大明王の一尊である大威徳明王は、インドのことばであるサンスクリット語でヤマーンタカ（死神ヤマ〈閻魔天〉を倒す者）といい、ヤマの象徴である水牛にまたがる姿をしています。足が6脚あるため、日本では六足尊とも呼ばれました。水牛は、一般的にはうづくまる姿が多く、直立する水牛として珍しい遺品といえます。また、大威徳明王が6脚すべてを左右に垂らす姿勢も類例が少なく、何か特殊な典拠があったのかもしれない。

的確な肉取りや自然な着衣表現から、鎌倉時代に製作されたとみられます。水牛も同時期に造られたとみてよいでしょう。詳しい来歴は不明ですが、安永6年に再建された伝法院客殿の護摩堂に安置されました。不動明王立像（No.1）とともに文化10年の『浅草寺志』に記された像にあたると思われる。

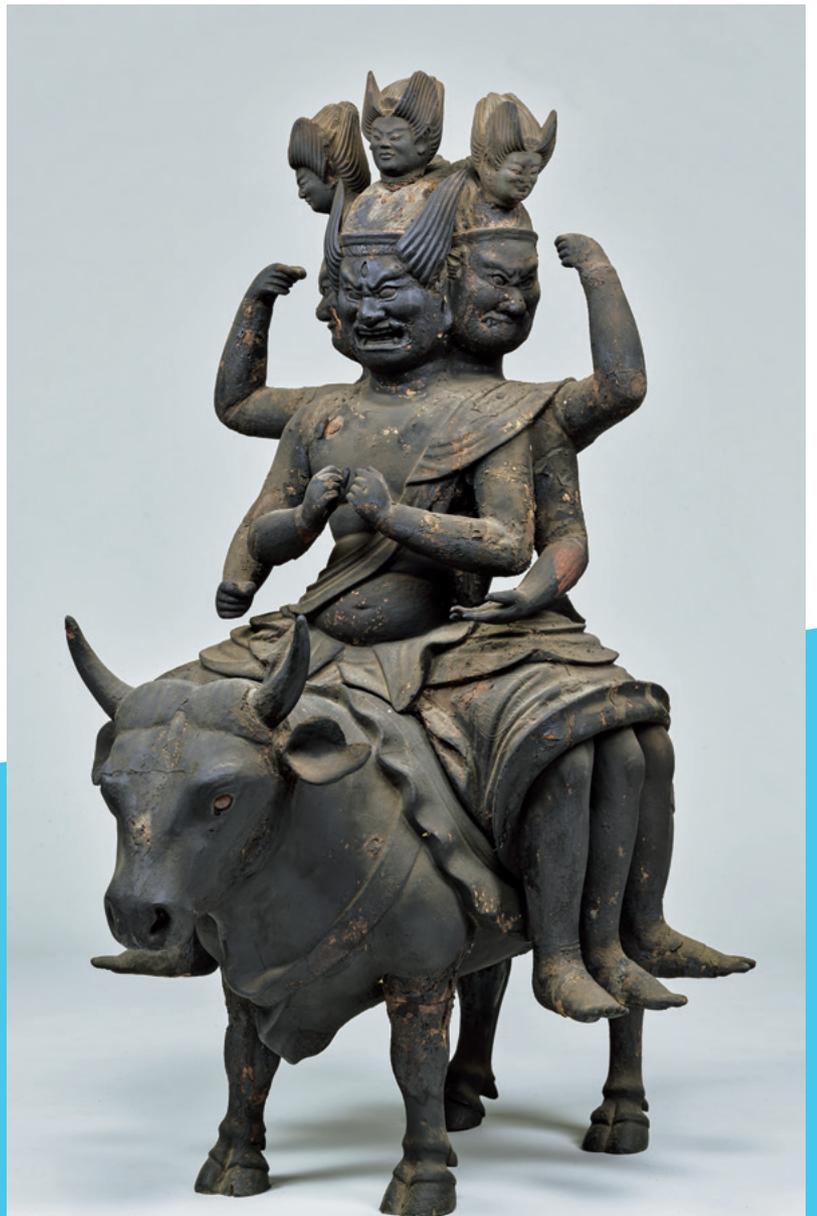


参考
聖観音菩薩像（柳御影）
文政10年（1827）頃
浅草寺蔵
（画像提供：浅草寺）

浅草寺の秘仏本尊

推古天皇36年に隅田川に現れ、浅草寺の本尊として信仰を集めてきた観音菩薩像は、大化元年（645）、夢のお告げにより勝海上人（生没年不詳）が秘仏と定めて以来、代々の住職でさえ拝することはできません。

諸説ありますが、中興の祖である慈覚大師円仁は、秘仏本尊の代わりとなるお前立ちの像を造り、あわせて柳の木にその姿を刻んで版画にしたと伝えられます。その姿は、左手で蓮華の茎を持ち、右手を添えて蕾を開こうとするものです。この版画は、のちに「柳御影」と呼ばれ、他見の許されない秘仏本尊の代わりに親しまれてきました。

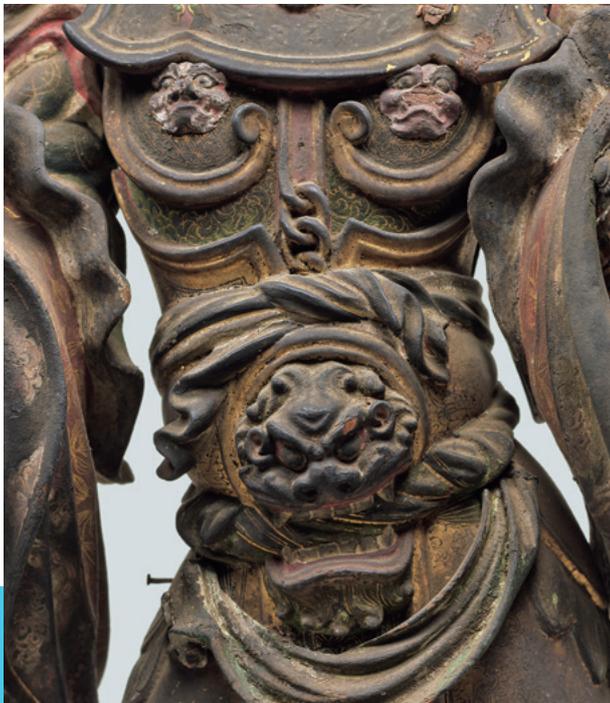




広目天

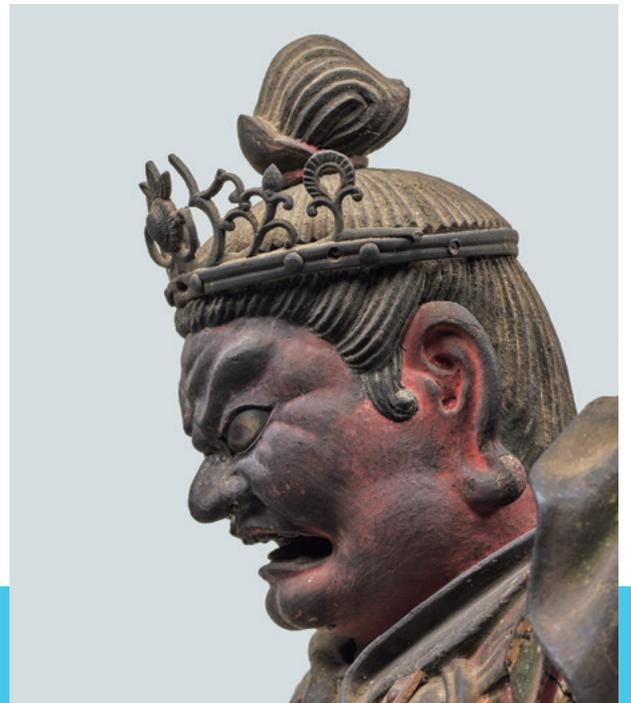


増長天



広目天（部分）

ベルトのバックルにあたる獅噛は、獣や龍など、各像で異なります。



増長天（部分）

拝する者を睨みつけ、顔中の筋肉を強ばらせた点が、迫真的で見事。

3. 四天王立像

The Four Heavenly Kings
鎌倉時代・13世紀

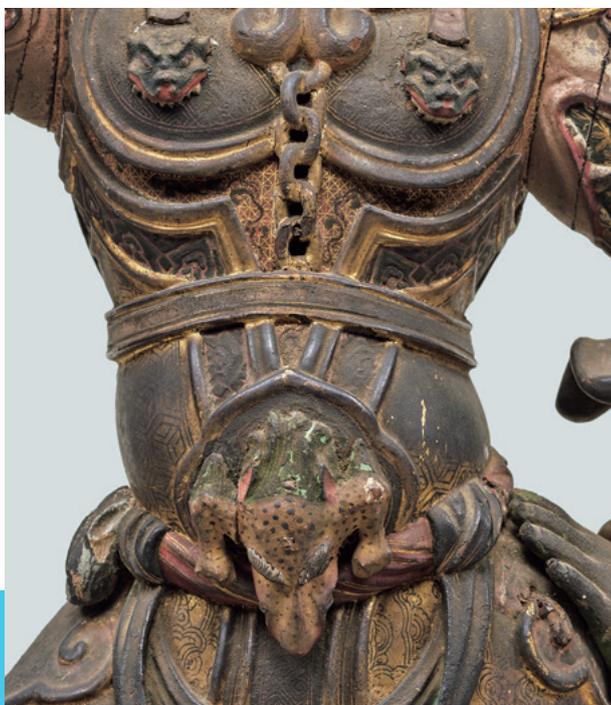
東南西北の四方を護る四天王の像です。持国天を緑、増長天を赤、広目天を白、多聞天を紺とする配色や、体勢の組み合わせは、鎌倉時代に運慶（生年不詳～1223）たちによって再興された奈良・東大寺大仏殿の四天王像（現存せず）にならうとされます。表現や技法が近い類品に、文永6年（1269）頃の東大寺千手堂の四天王像があります。



持国天



多聞天



持国天（部分）

華麗な彩色や、極細の金箔で表わされた戔金文様も見どころ。



多聞天（部分）

内に込められた怒りの表情が、繊細な彫刻で表わされます。

堅実な写実的表現を基調とし、1尺（約30cm）の像にしては珍しく、頭部と体部を別材とするなど細かな部材で構成されており、彩色などの装飾も入念にほどこされています。このことから、鎌倉時代に奈良を拠点に活躍した仏師善円（1197～1258）を中心とする、いわゆる善派系統の作者が想定されます。昭和三十二年（1978）に朝日信用金庫の会長を務めた長野幸彦氏（1932～2017）から寄進されるまでの来歴は確認できないものの、旧箱には「南都興福寺伝来」という箱書きがあります。



頭部の肉づけは生々しく、実際の人体に近い表現がなされています。

4. 僧形坐像

Buddhist Priest

唐～五代十国時代・9～10世紀

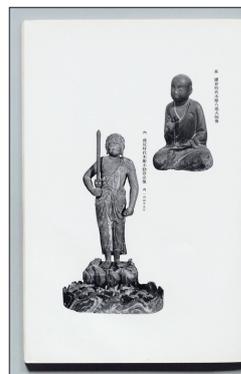
再発見された僧形坐像とその仲間たち

浅草寺には、戦後さまざまな支援者が寄進しました。美術史上注目すべき作品も少なくありません。そのひとつが僧形坐像（No.4）です。頬が長く、肉感的な頭部の表現に対して、体部はおおまかに表わされ、脚の組み方もはっきりしません。こうした表現に加え、用材にはクスノキ科の広葉樹材を使用し、瞳に練物とみられる異材を嵌めるといった技術的な特色から、中国の江南地方で、唐から五代十国時代にかけて製作されたとみられます。

従来、大きさがほぼ同一で、表現や技法が酷似する僧形像が複数知られていました。大阪・観心寺像（重要文化財）がその代表で、滋賀・千手寺像、京都・善願寺像（2体）、アメリカのミネアポリス美術館像の計5体があります。ひときわ出来栄が優れる観心寺像のみ、資財帳の記載によって元慶7年（883）時点での所在が知られるものの、それ以外の像の来歴は不明で、そもそも同じセットかどうかわかりません。各像は年齢を造り分けていますが、特定の人物を表わした肖像とは考えにくく、模範的な僧侶の姿として信仰された聖僧像である可能性が指摘されています。

その5体のほかに、昭和13年（1938）に高島屋で開催された古美術品の売立に出品された像の存在が知られていま

したが、行方がわからなくなっていました。近年の調査により、浅草寺の僧形坐像がまさにこれにあたる像であることがわかりました。来歴は不明ながら、昭和53年に長野幸彦氏より奉納されたことが寺に残る記録から判明しました。本像の再発見を経て、一連の僧形像の研究がますます盛んになることが期待されます。



参考
売立目録『東洋古美術展覧会目録』
高島屋、昭和13年
(画像提供：東京文化財研究所)





5. 仏頭

Head of a Buddha

平安時代・12世紀

頭部に肉髻の瘤を表わす一般的な如来の姿ですが、体部が失われているため尊名は特定できません。頬の張った丸顔で、穏やかな表情をつくるのは、平安時代後期（12世紀）に全国各地で流行した仏師定朝（生年不詳～1057）の作風に由来します。おそらく坐像なら3尺（約90センチ）、立像ならその倍ほどの大きさだったのでしょうか。たび重なる災禍にあった浅草寺で、頭部だけ大切に伝えられてきたことから、寺内の堂宇に祀られていた可能性があります。



6. 菩薩坐像

Bodhisattva

宗清作 南北朝時代・暦応2年(1339)

切れ長の目と高く結われた髻が印象深い菩薩像。体部は一材を前後に割って成形しており、背面材裏側の墨書銘から製作年や作者が判明します。美作法橋の肩をもつ仏師宗清（生没年不詳）は、「宗」の字から宗慶（生没年不詳）弟子筋の慶派仏師とみられ、宗盛や宗誓といった名前でも愛媛・大山祇神社の守門神像や広島・常称寺の阿弥陀如来立像といった遺品が残ります。近代以前の来歴はわからないものの、大正時代の売立目録に登場し、某家から大岡育造氏（硯海、1856～1928）の手を経て、昭和53年に長野幸彦氏から寄進されました。

7. 五髻文殊菩薩坐像

The Bodhisattva Monju

鎌倉時代・13～14世紀

左脚を立て膝にする体勢が珍しい菩薩像。頭上に五つの髻を結うとみられ、知恵をつかさどる五髻文殊菩薩の可能性がります。小像ながら肉感的な体軀や写実的な衣の表現が巧みで、鎌倉時代に製作されたものでしょう。厨子に由来が記されており、明治時代に奈良で見出されたのち、多数の名士の手を経て、昭和4年（1929）に浅草寺貫首の就任祝として大森亮順氏（1878～1950）へ贈られたことがわかります。



8. 阿弥陀如来坐像

The Buddha Amida

室町時代・16世紀

目が細く、やや下膨れの顔立ちや、賑やかな衣の襷の表現から、仏師椿井次郎（生没年不詳）が製作したとみられます。椿井次郎の他の作品との比較から、天文年間（1532～55）頃の作と考えられます。椿井仏所は鎌倉時代末期に起源をもつ奈良の造仏所で、室町時代を通して活躍しました。当時では珍しい、胸の前で説法印を結ぶ阿弥陀如来の姿は、2代遡る椿井春慶（生年不詳～1499）が再興を担当した多武峰妙楽寺（現奈良・談山神社）の講堂本尊になったとの説があり、典拠が推測できる模像として貴重です。

聖天は、歓喜天ともいわれる、インドのガネーシャ神に由来する財福神です。日本では、象の頭をもつ男女の神が抱き合う姿で表わされるのが一般的ですが、象をあしらった冠をかぶる童子の姿でも信仰され、歓喜童子とも呼ばれます。着衣の華やかな文様が目を引きますが、厨子内の貼紙によれば、寛永寺僧の凌雲院尚詮（生没年不詳）が開眼し、代々「神田宗庭」を襲名した同寺の絵仏師が彩色したとわかります。江戸時代、浅草寺が寛永寺の管理下にあったために伝来したのでしょう。

9. 聖天坐像

The Deva Kangiten

江戸時代・17～18世紀





10. 愛染明王坐像

The Wisdom King Aizen
鎌倉～南北朝時代・14世紀

煩惱すら悟りに昇華させる密教では、愛欲をつかさどる仏として愛染明王が信仰されました。獅子をかたどった冠や赤い身色が特徴です。6本の腕をバランスよくまとめ、体部の奥行きも厚く、衣の襷にも堅実な写実的表現がみられます。やや誇張された表情などをふまえれば、14世紀初め頃に製作されたとみられます。小さな像なので構造上は不要ですが、像底材から像心束と呼ばれる支柱を彫り出すなど、作者のこだわりがうかがえます。



左：雷神、右：風神

11. 風神・雷神立像

The Wind God and Thunder God
鎌倉～南北朝時代・13～14世紀

西方起源の神である風神と雷神は、日本では浅草寺雷門（風雷神門）に安置されていることで有名ですが、本来は千手観音をとりまく二十八部衆と呼ばれる神々に伴うことの多い尊像です。この2体も、もとは群像の一部だった可能性があります。滑稽味のある表情や、躍動的な体勢は類品の多くと同様に、京都妙法院三十三間堂（蓮華王院）の風神・雷神像（鎌倉時代・13世紀）にならいますが、片脚で立ち疾走するような姿勢や、風神の袋の持ち方などが特徴的です。

13. 角大師坐像

The Buddhist Priest Tsuno Daishi
江戸～明治時代・19世紀

12. 慈恵大師坐像

The Buddhist Priest Jie Daishi
江戸時代・18世紀

比叡山中興の祖とされる慈恵大師良源（912～85）は、最澄（767～822）と並び広く信仰の対象となった有名な天台僧です。厳しい表情、数珠と金剛杵を持つ姿で知られます。安永6年再建の伝法院客殿内祖師堂には天台ゆかりの祖師たちが祀られます。本像もその頃に製作されたのでしょうか。良源にはさまざまな逸話があり、疫病の神を退けた際に自身も鬼の姿に変化したとされます。その姿は角大師と呼ばれ、護符などの魔除けとして信仰を集めました。彫像の遺品（No.13）は珍しく、慈恵大師坐像（No.12）のそばに安置されていたようです。



- ・参考文献：浅草寺什宝研究会編集・紺野敏文監修『浅草寺什宝目録』1彫刻編、金龍山浅草寺、2018年
- ・作品はすべて東京・浅草寺所蔵です。
- ・本特集は、平成24～29年（2012～17）に浅草寺什宝研究会により実施された、悉皆調査の成果を反映しています。また、作品情報の一部は奥健夫氏（文化庁主任文化財調査官）よりご教示いただきました。
- ・本特集はJSPS科研費 JP20K12872の助成を受けて行なった研究成果の一部です。

表紙：雷門（風雷神門）（画像提供：浅草寺）、No.3



特集 浅草寺のみほとけ

令和3年（2021）9月28日発行

執筆：西木政統 展示企画：西木政統、浅見龍介、血井舞、増田政史 撮影：藤瀬雄輔 翻訳：フランク・ウィットカム（以上、東京国立博物館）

デザイン・制作・印刷：能登印刷 編集・発行：東京国立博物館

©2021 東京国立博物館 Tokyo National Museum